

ネット炎上について考える

映像作品展『炎上』報告書

会期：2025 年 2 月 3 日（月）～ 2 月 7 日（金）10:00 ～ 18:00

会場：愛知淑徳大学 長久手キャンパス 1 号棟 1 階 多目的ホール

協力：愛知淑徳大学 創造表現学会

展示メンバー：創造表現学部メディアプロデュース専攻 1 年

三輪つきの／深尾心乃／土方清姫／福田蜜葉

1. 展示概要

本展示は、現代における「ネット炎上」という現象に対し、

映像を用いて批評的にアプローチする試みである。

「炎上」という言葉は、かつては火が激しく燃え上がる様子を表していたが、
現在では SNS 上で拡散される批判の象徴へと変容している。

本展では、そうした言葉の温度に注目し、SNS と日常、

そして言語のあり方を見つめ直す。画面越しのやりとりが主流となった今、
言葉と向き合うための契機となることを目指して企画された。

2. 展示作品について

出展者 4 名それぞれが「炎上」をテーマに、個人的な経験や

メディア現象への批評を交えながら、独自の視点で映像作品を制作・展示した。

《スクリーン越しの温度》

SNS における言葉の暴力を

モーショングラフィックスと実写映像で表現した作品

《消費の残骸》

炎上を傍観する 1 人として、炎上現象を通して

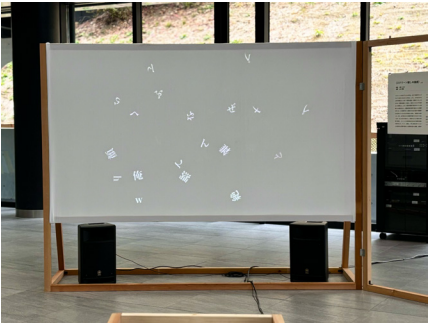
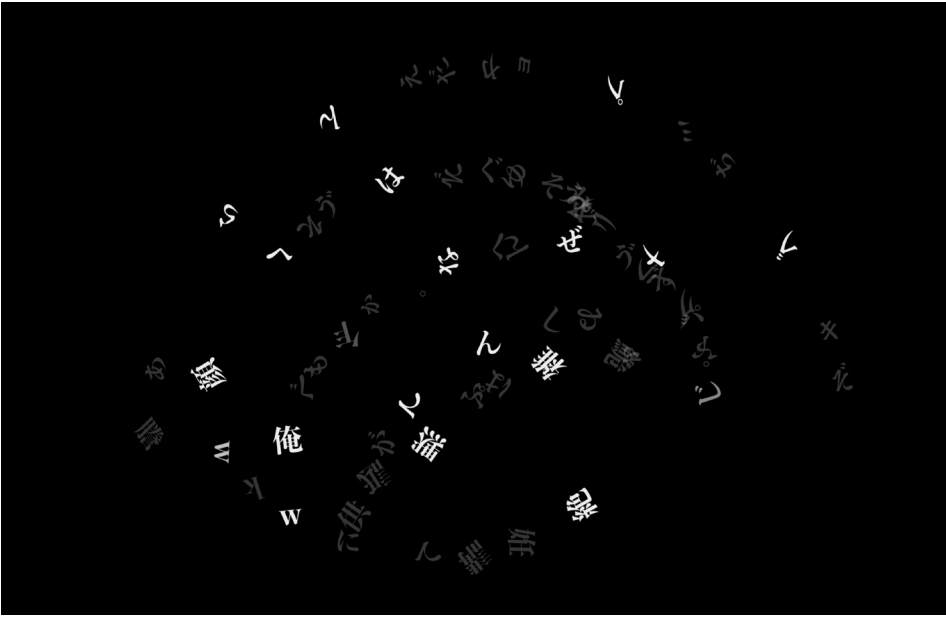
無自覚に繰り返す消費行動を描き出したモンタージュ映像

3. 来場者

来場者数：約 120 名（5 日間合計・記帳数ベース）

学内関係者が中心、また一般来場者、学生の友人・家族など、幅広い層が来場

4. 展示の様子



5. 展示を行ってみて

楽しかったこと

何度も何度も作っては書き出して、1 から見て、修正する。この言葉を聞くだけだとめちゃくちゃめんどくさいと思うけど、自分の満足いく作品にするために、この過程をやりすぎるぐらいやったことが自分にとっては継続力、忍耐力、集中力とともに作品のクオリティーが高まって楽しかったです。

難しかったこと

展示会はメンバー 4 人で創り上げるものなので意見、価値観、それぞれのペースの違いがあり、言い合いがあったことです。お互いがいい展示にしたいからこそ言い合いがおきるし、みんなの思いをこの展示に入れることは難しい。でも話し合いを重ねることで、共通点や、今まで見つからなかったアイデアが思いつき、今回良い展示を行うことができた。

学びになったこと

展示会を行うにあたっての進め方、プレゼンテーション、企画書の作り方、スケジュールの組み方、フライヤーの作り方、予算の立て方、自分の思いを作品にする方法、アンケートの作成方法

深尾心乃

「炎上」というテーマの中で私は「消費」に焦点を当てて映像作品を制作しました。

制作に取り掛かるまでの期間の中で、頭の中に漠然とした自分が他者に伝えたい問題意識やイメージが生まれているのに、それをうまく映像にする方法が分からず、かなり長い間模索しました。自分が伝えたいことをどのようにして映像で撮るか、どのような表現を用いれば良いのか思いつかず、そこに最も苦労しました。絵コンテを描き、撮りたい映像が決まってからの制作は楽しく、完成に向けて一直線に作品作りに取りかかれたと思っています。映像の中でみかんの皮が剥けていく様子をコマ撮りで撮影したシーンがあるのですが、その編集がとても難しかったです。みかんが剥けていく速度の調節や、その映像に合わせる音選びもかなり苦労しました。みかんが剥けていく速度が一定よりも、高速になったり、急にゆっくりになったりとか変化したほうが面白いということで、見ていて気持ちの良い映像になるように速度にはこだわりました。音選びでは、はじめはみかんに全く関係のない砂浜をザクザクと歩く音を組み合わせていましたが、音と映像がミスマッチでどこかチグハグした印象を受けたため、全く違う音をつけました。軽快でポップな音をつけることで、みかんが剥けていくシーンがより印象的で愉快的な映像に変わったと思います。この音が映像にピタッとハマるよう、とても苦労して音をつけました。

また、展示空間を作る、という初めての経験を通じて、空間構成の大切さを学びました。作った作品をどのようにお客さんに見せるか、という視点が私は欠如していたため、お客さんがストレスなく作品を鑑賞できているのはそのような計算された空間があるからだとか改めて気付かされました。次の展示では空間構成も自分で考えたいと思いました。

三輪つきの

まず企画を考えて、プレゼンテーションを行い、それを形にしていく。そもそも自分から案を出し、それについて深く考えていくということを今まで積極的にやってこなかったです。だけど、私が展示会をやると決めた理由は、大学に入って自分の継続性、想像する力を試したいって言う思いからこの展示会をやりました。最初はほんとに何もわからなかったけど、ひたすら自分の思いを言葉に置き換えて試行錯誤しながら、それを作品にしました。何をどのように考えればよいのか、スケジュールの立て方、予算、展示プラン、フライヤーなど考えることが山ほどできました。右も左も分からない私達展示メンバー4人だけではやり遂げることはできなかったと思います。でも、森田先生が何もわからない私たちに、1から私たち4人の性格に合わせ、指導してくれ、展示が終わる最後の最後までずっと側にいてくれて創り上げることができた展示会だと思ってます。言葉は人をいい方向にも悪い方向にも操ることのできる一つの武器で、言葉は面白いと思ったので文字によるアニメーション作品をつくりました。どんなに小さな言葉も集積すると大きな力となり、「炎上」は一瞬で人を追い込み、すぐに消える。でもそれは完全には消えない。どこかの誰かが傷ついているのにあたかも完全に終わったかのように他人は日々を過ごす。私はその当たり前のように使ってる言葉の中にある温度に注目して作品を作った。この思いを作品にするためには、私には何ができるかどのような作品が作れるのかと思い一回作ってみた。できたのはひたすら誹謗中傷の文字が横に流れる映像だった。この映像をどのように変えていけば自分が伝えたい言葉の思いを作品にできるか。知識がない私は、他人の作品をみて学ぶことを始めました。毎日大学に残り1人の部屋でひたすらパソコンを眺めペンを走らせる日々が始まりました。ただ横に流れる文字映像から、「炎上」を日々の生活に置き換えた映像、文字で心臓を作りそれを動かした映像と変化していききました。作っていく上で私は今まで文字のつながりばかりを見ていたけれど、文字一つ一つでなにか演出ができるんじゃないかと思った。また、文字が出てくるタイミングやフォント、大きさ、配置を少しずつ変えた。この時、文字の配置に一番こだわった。文字は単に横か縦どちらかに配置して書くことが普通だけど、不規則的に横や縦に文字を配置することで、目に入りやすくなるため、見た目にこだわった。さらに、文字が散りばめられるような映像を入れることで、文字に動きが現れる。文字が敷き詰められている映像を作ることで、圧迫感を表した。この時に砂嵐を意識して作成した。コメントが絶えず打たれているという映像を作りたかったからだ。心臓を文字によって輪郭から少しずつ作っていくことで、その人を徐々に攻撃しているという表現にできた。そこから前向きな言葉を文字で映像化することで前に向かって頑張ってほしいという思いが込められている。

土方清姫

映像に音を当てることについて、全体が1つの映像に思えるような統一感を出すことが1番難しいと感じました。色々な音を使用することにより、複数の映像作品を合わせたような映像だと感じる場面がありました。そこで、アドバイスにより、BGMのような後ろの音？を伸ばすと、統一感が生まれることを知りました。同じ音でも高低をつけるだけで大分印象が変わり、全く別の音を使用した場合よりも面白さがあることに気づきました。音で映像の良さを無くさないように、映像と釣り合うような音をつけることに関して、特に頑張りました。

期限内に作品を作り終えることも、納得のいく作品を作るために試行錯誤したことも、正直大変でした。しかし、一つ一つの作業が終わったときの達成感や喜びが忘れられないぐらい良い経験だったと思います。メンバーが良い展示会にできるように、意見を出し合ったときに少しぶつかりあったこともなぜか楽しかったです。什器製作も作品制作も終わり、展示会が形になったとき、涙が溢れるような感動がありました。これは、中々できない良い経験の1つだと強く感じます。自分がやりたいと思ったことで展示ができたこと、それにあたり未熟な自分を支えてくれた方々に本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

福田蜜葉

今回作品は作らず全体監督として参戦しました。最初は教室展示でやるとの意向だったためその空間の教室っぽさをどうしたら無くせるのか、作品物に注目できるかを大切にしてレイアウトを考えていました。学校側との都合で多目的ホールになってしまったので、考えたレイアウトが使えなくなったのは残念ですが次機会があれば、一度考えた経験をもとに良い展示空間を作れたらと思います。また、2人の作品をどうしたら人に伝わりやすい映像にできるかに重きを置いてアドバイスなどもしました。作家の想いを形にしながら人に分かりやすい映像を作るのは大変でした。

3.4年生の卒展とは違い自分たちで什器を作り展示したことに誇りを持っています。木材を買い、切ったり、ビスを打ったり、手作り感のある什器になってしまいましたが苦勞した分思入れがあります。

展示を終えて私も何か作品を作りたいと思いました。春休みに入ってから展示にも関わらず来場してくれる方がいて、ちゃんと作品に対しての感想も貰えるすばらしい機会だと思いました。3人が作品作りに励んでいるのを側で見ていて感心したし私も作品を作りたいと思わせてくれました。後押ししてもらえたような展示になりました。